

令和元年5月教育委員会定例会 会議録

令和元年（2019）5月28日（火）午後2時、出雲市教育委員会定例会を市民応接室に招集した。

1 会議に出席した委員

教 育 長	槇 野 信 幸
教育委員(教育長職務代理)	松 浦 剛 司
教 育 委 員	小 豆 澤 貴 洋
教 育 委 員	水 陽 子 志
教 育 委 員	錦 田 剛 志

2 説明のため会議に出席した者

教 育 部 長	植 田 義 久
教育部次長（教育政策課長）	建 部 敏 紀
学 校 教 育 課 長	金 築 健 志
児 童 生 徒 支 援 課 長	兒 玉 浩 二
教 育 施 設 課 長	園 山 裕 二
学 校 給 食 課 長	金 森 真 治
出 雲 科 学 館 長	矢 田 浩 一
学 校 教 育 課 主 査	山 崎 創
児童生徒支援課課長補佐	渡 部 俊 樹
出 雲 中 央 図 書 館 長	柳 楽 伸 一 郎
保育幼稚園課課長補佐	山 崎 久 美 子

3 会議の書記

教 育 政 策 課 課 長 補 佐	常 松 晃 好
-------------------	---------

4 傍聴者

3人

開会

(榎野教育長) 只今から、令和元年5月出雲市教育委員会定例会を開会します。
本日の会議は、お手元に配付しております日程のとおり行います。

1 教育長行政報告

(榎野教育長) それでは、教育長行政報告を行います。(以下、報告項目のみ掲載)

(1) 前回以降の動向

H31.4.26	鯉のぼり掲揚式
R1.5.8	臨時市議会 ～5.9
R1.5.10	校長面接 ～5.28
R1.5.13	全国春の交通安全運動出発式
R1.5.13	市議会全員協議会
R1.5.14	園長の会議
R1.5.15	小学校陸上大会
R1.5.17	管内教育長会
R1.5.18	出雲市教職員協議会総会
R1.5.23	全国都市教育長協議会総会・研究大会 ～5.24
R1.5.25	島根県教職員協議会総会
R1.5.28	定例教育委員の会議

(2) 今後の予定

R1.5.29	保幼小連携推進委員会
R1.5.30	いじめ問題対策委員会
R1.5.30	学校給食会理事・評議員会
R1.5.31	出雲地区租税教育推進協議会
R1.5.31	市危機管理推進会議
R1.5.31	校長の会議
R1.5.31	自治会連合合同会
R1.6.4	奨学事業運営委員会
R1.6.5	ポイ捨て一掃大作戦
R1.6.6	学校保健会理事・評議員会
R1.6.7	檜山小学校・東小学校再編統合推進委員会
R1.6.13	市議会初日 ～7.2
R1.6.17	市議会一般質問 ～6.20
R1.6.24	市議会文教厚生常任委員会・予算特別委員会分科会
R1.6.25	定例教育委員の会議

(槇野教育長) 只今の報告で、質問等がありますか。

(各教育委員) ありません。

2 会議録の承認

(槇野教育長) 次に、会議録の承認に入ります。前回4月定例会の会議録について、何か意見等がありますでしょうか。

(各教育委員) ありません。

(槇野教育長) 特に意見等ありませんので、4月定例会の会議録については承認します。

3 議事

(槇野教育長) それでは、議事にはいります。最初に「議第13号 出雲市立学校における地域学校運営理事会理事の辞任及び任命について」を、教育部 建部次長 に説明をお願いします。

(建部次長) 資料に基づき説明

(槇野教育長) 只今の、議第13号について、何か質疑等はありませんか。

(各教育委員) ありません。

(槇野教育長) 特に質疑等がないようですので、議第13号について、承認してよろしいですか。

(各教育委員) 異議なし。

(槇野教育長) ご異議ありませんので、議第13号を承認します。

(槇野教育長) 次に、「議第14号 出雲市立幼稚園における幼稚園運営協議会委員の辞任及び任命について」を、保育幼稚園課 山崎課長補佐 に説明願います。

(山崎課長補佐) 資料に基づき説明

(槇野教育長) 只今の、議第14号について、何か質疑等はありませんか。

(各教育委員) ありません。

(槇野教育長) 特に質疑等がないようですので、議第 14 号について、承認してよろしいですか。

(各教育委員) 異議なし。

(槇野教育長) ご異議ありませんので、議第 14 号を承認します。

(槇野教育長) 次に、「議第 15 号 教育長の臨時代理について（出雲市立図書館協議会委員の辞任及び任命について）」を、出雲中央図書館 柳楽館長に説明願います。

(柳楽館長) 資料に基づき説明

(槇野教育長) 只今の、議第 15 号について、何か質疑等はありませんか。

(各教育委員) ありません。

(槇野教育長) 特に質疑等がないようですので、議第 15 号について、承認してよろしいですか。

(各教育委員) 異議なし。

(槇野教育長) ご異議ありませんので、議第 15 号を承認します。

4 報告

(槇野教育長) 次に、報告事項に入ります。報告（1）「幼児教育の無償化について」を、保育幼稚園課 山崎課長補佐 に説明願います。

(山崎課長補佐) 資料に基づき説明

(槇野教育長) 只今の報告（1）について、何か質問等はありませんか。地方負担額等は、いつごろ明らかになるのでしょうか。

(山崎課長補佐) 無償化に係る経費等に関して国が全額措置するということになっていて、まずは、準備等にかかる事務費部分の予算につきまして、6 月議会に提出することとしています。その後、確定したものについて、9 月予算に提出することとしています。

(槇野教育長) 今年度は良いのでしょうか、先々地方負担が発生してきますよね。そ

のあたりの説明はどうなっていますか。

（山崎課長補佐） 今後、制度が開始してから、想定されない様々な事柄が出てくる可能性もありますし、引き続き国でしっかり財政措置されるよう要望していきたいと考えますが、今のところは、交付税措置ということで説明されています。

（槇野教育長） 制度がもっと確定した段階で、いろいろと聞きたいと思います。ほかはいかがでしょうか。

（各教育委員） ありません。

5 協議

（槇野教育長） 次に、協議事項に入ります。今回の定例会では、松浦委員から協議テーマをいただきました。「協議（１）教育委員発案テーマによる意見交換「学校の当たり前を疑ってみませんか？」」について、先ず始めに、松浦委員から、ご提案内容の説明をお願いします。

（松浦委員） 資料に基づき説明

（槇野教育長） ありがとうございます。それでは、話を少し分解して意見交換を進めていきたいと思いますが、「宿題の廃止」、「定期テストの廃止」に関してどのようにお感じになるのか、お聞かせいただきたいと思います。

（松浦委員） 中間・期末テストは、とかく通信簿の材料にするために行われているケースが非常に多くて、もちろん、現場の先生からは「そうではない」という意見もあるかもしれないですけども、中間、期末のテストの実施は、何かに定められたものでもないもので、やめようと思えば簡単にできる、柔軟に考えたときにそういうやり方も考えられるということがこの本に書いてありました。その中、單元ごとに小テストを行うやり方に変えたので、自分が苦手な部分も興味を持つことができ、宿題がなくても、自分で勉強をする時間が増えたという結果であるということです。

（小豆澤委員） 今、国において「スーパーシティ構想」というものが提言されていると思います。出雲市がそこに手を挙げる動きは見られませんが、その中でも教育部門について具体的に方向性が挙げられていて、近未来都市の設置なんですけども、動画など含めネット配信による授業といったものが挙げられており、先ほどの話では授業ごとに小テストを行って全員ができるようになるまで繰り返すということでしたが、動画配信などにおいても同様で、自分のペースでこなせるようになります。先生たちは全員が「５」をとることになるので困りますよね。やはり、おっしゃるとおり、今は「評価の規準」とするための学習システムということではないかと思います。一方、通信制の学校は今

既にそういう方式で、自分の時間の中で何度も繰り返し動画で授業を受け、そのたびに小テストをして、分からないところは担任に連絡を取り、わかるまで教えてもらって繰り返す、そういったことが可能になっています。最後におっしゃられたように、100年続いたものであろうが、大儀に則って、変えることを恐れないということに、ただただ賛成です。

（水委員） ここにあるような試みにチャレンジしてみようという校長先生が現れればすごいなと思います。宿題というのは、ドリルの答えを写していく子もいれば、10分で終えて遊びに行く子もいれば、寝るまでかかってやるようなお子さんもいらっしゃる、その宿題がどれだけ学力定着に結びついているかはかなり疑問で、ここにも載っていますけども、宿題をしていれば、保護者は勉強時間が確保されていると思う、確かにそのとおりだなと思います。ただ、宿題をなくすのであれば、やはりそれに見合う何か、昼間の授業内容を定着させることが宿題の目的であるならば、宿題をなしにした分をどこで補うのか、ということを考えないと、宿題は意味がないからやめようということで終わってほしくはないと思いました。

（錦田委員） もっともなことが書いてあるとは思いますが、それはこの校長先生の力量、リーダーシップ、マネジメント能力があるからこそだと思います。この1年間、学校の問題を見てきた限りでは、やはりすべてにおいて学校長のマネジメント力にかかっているんだろうなと感じています。会社や医療現場等、どこでも同じだと思いますけども、校長先生が考えを持っていても、部下の先生方がついてこられるかどうかということが重要だと思います。それと、私も今大学で教えていますが、少なくとも公立系の大学では、定期的なテストのみで評価は行われていません。普段のディスカッション能力であるとか、口頭試問であるとか、あとは、單元ごとの試験によって評価しますので、大学に対する誤解もこの本にはあるのかなと感じました。

（槇野教育長） 現場サイドというわけではないですが、「指導主事」の立場でご意見をいただきたいと思います。植田部長、いかがですか。

（植田部長） 先ず、宿題のことですが、文科省の質問紙でも、中身ではなく時間を論じる傾向にあります。そこにひとつ「勘違い」があるということと、「100年続いてきた仕組みを変える」という話がありましたが、変えたい部分はたくさんあります。ただ、保護者や地域の方々の支えにより続いてきたものもあり、本当はそこを変えていかないといけないのかもしれませんが、大きく変えることが難しい部分はあると思います。ただ、働き方改革ということも言われている昨今ですので、学校一体となって少しずつ取り組む必要はあるかなと感じています。

（槇野教育長） 兒玉課長はどうでしょうか。

（兒玉課長） 3月まで現場で中学校の教員をしていました。特に宿題のことについては、

学校の中でも議論があります。なぜ宿題を出すのかということで考えていたことは、いずれ、高校、大学、社会人といった場面で、必ず自分で勉強しなくてはならない瞬間が訪れる、そのための土台作りというか、習慣作りといいますか、それを中学校の段階でしなくてはならないのではないかと考えてながらやっていたわけですが、この本にありますように、全員同じ宿題を出すときもありますが、最近は、授業の内容から発展的な内容を個人ごとやグループごとに出すなど、そういうふうな改革といいますか、内容についてもどんどん変わってきているところも現状としてはあります。勉強への意欲を醸成することが先か、習慣付けが先かという議論もありますが、島根県は家庭での学習時間が少ないということも随分言われていますので、宿題は出していこうという方針でずっときているのかなと思っているところです。

（槇野教育長） 山崎主査はどうでしょうか。

（山崎主査） 私の場合は小学校ですけれども、宿題をなくしたときに、小学校の子どもたちが自然発生的に家庭で自ら勉強をするかと考えると、とても難しい話だなと思います。今、小学校では、宿題については、スキルの定着を目的としたものと、自学といって自分で考えて自分で興味を持ったものに取り組んで自分で勉強をする習慣をつける、大きくこの2つの内容の宿題があると思います。それで、スキルの定着については、学校でやらなくてはならないことではあるんですが、それが不十分だから家庭でやってもらっているという状況があって、子どもとしてはあまり面白くないと思います。ただ、スキルの定着は必要で、家庭の協力を得ながらやるということがすごく大事になっているので、小学校段階では必要だと思っています。もうひとつ、自分で学習する力ということも、些細な課題あるいは興味などを大事にして、少しずつでも積み上げていく、そういったことも小学校段階では必要ではないかなと考えています。いずれにしても、家庭の教育力もすごく影響している面があると思います。なので、子どもが自分で言われるような力をつけるためには、どうすればよいのだろうか、という発想で見ていけたら良いのかなと思います。

（槇野教育長） お話を聞いていますと、小学校と中学校ではちょっと違うのかなという思いを持ったところですが、山崎主査は、中学校においてはこのやり方でもメリットがあるということになるのでしょうか。

（山崎主査） そうですね、メリットもあるでしょうが、宿題と定期テストはセットだと思っています、スモールステップで評価して一番プラスになるのは子どもだと思うんです。良い結果が出たら励みになりますし、悪かったら次がんばろうと思いますし、何らかのフィードバックを与えてあげないといけないと思っています、それが中学校でうまく機能するかどうかというところがポイントだと思っています。それにかわるようなフィードバックの方法があればと思います。

（松浦委員） 私も、もちろんこれが良いといって議題に挙げたわけではないのですが、

子どもたちを見ていると、宿題の量に疑問を持つこともあって、テストの前においても宿題を提出することを一生懸命やっている、点が取れる子はよいのかもしれませんが、一律にやっていたら、できない子はかわいそうだし、どの子にも同じ宿題をだすというのはあまり意味がないなと感じるところもあります。自学と言っても、冒頭おっしゃったようにひたすら写したりとか、そういうものを見ていると、こういう考え方もあるのかなと思ってこの本を読みました。会社なんかもそうですけど、「無理だ」とか「どうせ」とかいうことではなくて、目標を達成するにはどうしたらよいのかということ道を道から外れてでも、いろいろな方法を考えるということは、やはり学校の先生たちには、100年続いてきたことでもぶっ壊してでもやってほしいと思います。特に会社を経営しているとそういう局面って多いので、頭の良い校長先生ならできるだろうという思いです。

(小豆澤委員) これは、「宿題廃止して、定期テスト廃止して、成績上げましょう」ということではないんですね。おそらく子どもたちの教育として「人のせいにしなくなる」とかそういったことについてのやり方を教えてくださっていると思います。勉強がものすごく嫌いな子どもにとっては、小学校も中学校も「苦行」なんです。一方で先ほど言いましたように、通信教育などで動画で配信を受けて、すぐ小テストがある方式で、クリアすると、そういったことは苦痛ではないようで、「勉強はつまらない」という思い込みを持っていたところから、急に何かがチェンジする。「宿題」が子どもたちにとってつまらないものなら、それはやめて別のものを考えられたら良いのではないかなというふうには思います。先ほどスーパーシティ構想の話をしたのは、今後、学校というものが主体的な教育機関となることは、過疎地となっていく地域の子どもや先生たちの人数を考えてもありえないと思うからです。私は、できれば出雲市に堂々とその8月にスーパーシティ構想に手を挙げてほしいんですけども、どの関係者に聞いてもスーパーシティ構想の「ス」の字も知らない行政マンの方ばかりだったので、残念に思っています。

(榎野教育長) 私の感じたところを少し言いますと、宿題を画一的に、一律に子どもたちに課すということについては、大きな疑問を感じています。昨年も地域別校長懇談会でいろいろ話しましたが、習熟度別という言い方もできますが、それぞれの子どもにあった宿題を出していくことも一つのやり方だというふうに感じていました。もちろんその選択肢の中には宿題を出さないという選択肢もありかなというふうに思っていました。それから、昨年、自学ノートの意味、意義が本当にどの程度まであるんだろうかという問題提起もしました。主体的に課題をみつけて自分で学ぶという趣旨は良いのですが、良いノートは見本としてみんなにわかるようにして出すという話をたくさん聞く中で、時間だけをかけて中身はどうなのかなという思いは正直なところ持っています。それで、話を整理しますと、宿題のあり方というのは、この際大きく見直しをしても良いのかなという気がしますし、この麴町中学校の例も参考にしながらいろいろと議論を深めて、可能なところから取り入れて変革していけるのかなというふうに思いました。先ほども言いましたが、確かに小学校と中学校は違うなど、やはりかたちから入って習

慣付けしていくということも大事ですので、おそらく小学校もですね、低学年、中学年、高学年と違うと思うんです。ですので、中学校は、今日提案のあったようなやり方を含めて新しいスタイルを考えることは良いと思いますし、小学校は高学年くらいになると、また違った方法があるのではないかというふうな感想を持ちました。

次に、「全員担任制」にすると子どもが人のせいにしなくなるという話がありましたが、これについては、どのようにお感じでしょうか。

（錦田委員）やはり校長先生のマネジメント力が問われるということと、先ほどの問題にもかかわることですけど、植田部長がおっしゃいましたが、「地域性」は無視できないだろうなと思いますね。この本の舞台は「麴町」ですから、誤解を招かないように聞いていただきたいんですけども、政治家や学者など多数輩出している学校であるし、そういう学校の生徒であるから、気づきも早いし、取組もその方向に向かっていく背景があるんだと思います。それは無視してはいけない問題であって、十分地域性も考慮しなければならないのだらうと思いました。

（小豆澤委員）逆に疑問に思ったのですが、変えられない理由というのが「地域が作ってきた」というのは何ですか。校長先生が思い切ったことをやろうとすると地域が反対されるのですか。

（植田部長）そういうことはありませんが、やはり地域と関わる中で、簡単に校長や職員の思いだけで変えていくということはできないと感じることはあります。

（小豆澤委員）もうちょっと具体例があると分かりやすいと思います。地域の皆さんのこういう思いがあるから、こういうふうに変えたかったけどできなかったみたいな事例を紹介していただけると、理解しやすくなると思うんですけども、私の勝手なイメージからいくと、例えば相撲が伝統的に強い学校であったために、部活をやめることができなかったとか、そういう話だったら理解できます。どういったところで地域の圧力みたいなものを感じられるのかお聞かせください。

（植田部長）圧力はないですけども、今までずっとやってきたことを「今年もお願いします」と言われると、本当はやめたいんだけど、というようなことでも難しいということがあります。

（榎野教育長）宿題を廃止する、あるいは定期テストを廃止するということについての地域の反対はないと思いますね。説明すれば皆さん納得していただけたと思いますね。それで、戻りますけども、全員担任制については、どのようにお感じですか。

（小豆澤委員）裏を返せば全員が人のせいにしそうなところもあるので、これはスタッフによって大分違ってくるのかなとすごく思いますけども、校長先生が、最後は自分が全部責任を引き受けるんだという気持ちがないとできないと思いますから、これができ

るということは、校長先生の腹が据わっているんだろうなと感じます。一方で、人のせいにしない子どもが育つということはすごく素晴らしいことであって、やってみる価値は十分にあるんだろうと思います。

(水委員) 小学校と中学校と同じ議論はできませんが、中学校くらいになると、多数の目で見られるということは良いと思いますし、教員にとっても、名指しで保護者面談の指名を受けるということになると、自分がきちんとしていなければいけませんので、良いと思いますね。すごくおもしろい発想で取り組まれているんだなということを感じました。ただ、上手く行けばよいですけども、反対にいくととんでもないところにいつてしまうところがあるのは事実だと思います。高学年くらいになると、1年間に習う漢字を1学期に全部先に教えて、2学期と3学期は復習するというカリキュラムにすると、最後には必ず全員が定着しているというふうなことをやっている先生の本を先日読んだところで、ちょっと似ているなと思いました。1年間に文科省からこれだけしなさいっていうのが毎年あるわけですが、学校、クラスの中でも担任の先生のある程度の裁量でできることであれば、発想を転換してどんどんチャレンジしていただきたいと私は思います。発想を変えるということは、今の学校教育の現場には必要なことかなと思って今日の話聞きました。

(錦田委員) 小学校でいきなりこれをやるというのは、なかなか難しいかもしれません。高学年になればなるほど有効性が高まるかなと思いました。それと、教員といえども人間ですから、合う、合わないがあるんじゃないかなと思います。チームの中の人間関係もありましようから、そこも含めて校長の腹決めですよ。話が戻っちゃいますけど、校長先生のマネジメント力とリーダーシップと胆力だと思います。

(松浦委員) ある大学の教授から、音楽教室の例ですが、ピアノの個人レッスンやグループレッスンに、1ヶ月に1回違う先生を放り込みなさいと、そうすると、劇的にいろいろなことがわかったり、良くなったり、悪い部分が見えたりするので、うちの大学ではもうやっているよと教えていただきました。とにかく、「マキノ先生の生徒と保護者」と思いがちなんですけど、本当は音楽教室の生徒であって、その先生の生徒ではないじゃないですか。その子が音楽を勉強する上で楽しく気持ちよく続けていけたらそれでよいわけで、マンツーマンのその世界だけでひたることではないということを言われたことを、この本を読んでいて思い出しましたし、今回、私は宿題よりもこちらのことに思うところがあって、部活動の顧問や担任が対応を誤って、事態が悪化して云々ということもこれまでありましたので、単純に、こうだったらそうならないんだろうなと思ったんですね。もちろん、ここまで劇的にやらなくても、連携のコミュニケーションが円滑にその学校でとれていれば、良い事例に転がったんじゃないかなと思うんですけども、でも、なかなかその連携が取れないなら、こういう形を設けてやるというのもひとつのやり方なのかなと思います。むしろ、学校の先生はこのことのほうが抵抗があつて変えられないのかなと思うんですけども、いかがでしょうか。

（植田部長） 小学校でも高学年は教科担任を少しずつ取り入れていくという方針になっていますが、全員担任制となると、ニュアンスが違いますので、やるならば中学校かなと思います。本当にチームワークがしっかりしていて、強い気持ちがあれば可能だと思いますが、その条件が揃わなければ、メリットはあまりないのかなと思いました。

（児玉課長） 私は校長として勤務したことはありませんが、中学校は、ある意味これに近い、教科担任制、場合によっては9教科全部違う先生がやっておられるので、情報連携がスムーズにできていたら、良いかたちに進むと思います。それで、若い先生がいたり、年配の先生がいたり、指導が得意な先生がいたり、苦手な先生がいたり、様々です。校長のマネジメントプラス学年主任の負担といいますか、そういったものが非常に大きくなっていくのではないかなというようなことは想像できます。この本の中では、いろいろな先生の得意分野をとということで紹介されていますが、どうしてもリーダーとなる学年主任の先生とか、核になる先生の負担というのはやはり増えていくんじゃないかなということを感じるところであります。

（松浦委員） 全員担任制は、大空小学校というところでも、取り組んでいるということです。いずれにしても、視察に行っていたきたいなというくらいに、面白い取組です。それと、学校に戻ることが本筋ではないというか、目的は社会にアウトプットしてどう生きていくかというプロセスであって、不登校だと親が恥ずかしいような気持ちを持ったりする、そういう風潮をもう変えていかないといけないということが、この本にも書いてあって、発想を変えればいろんなことができるんだなと思いましたね。

（山崎主査） 個人的に私は賛成です。現状、学校の中では、担任と子どもの関係が崩れてにっちもさっちもいかない中、先生も苦しい、子どもも苦しい、という状況の学校が多いというのが事実です。それを変えるには、人間関係を変えるしかないと思っていて、そういった意味では、こうやって、いろいろな目で子どもを見る、子どもも行き場がいろいろあるというのは、非常に良いシステムだなと思います。ただ、懸念していることがあって、「教育は人なり」という言葉があってですね、良しにつけ悪しきにつけ、担任の姿を子どもが見て育つ、だからこそ教員は力をつけていかないといけないんだと、人間的にも教育の技術的なところでも、子どもの姿を見ながら、もっと自分はがんばらないといけないと思いながらやってきて、子どもと信頼関係ができたときはすごく嬉しくて、そういう本来の教育の喜びみたいなものを味わわない先生方が出てくるのではないかなということをお心配していて、自分が責任を持ってこの子を見るんだと、だから自分は力をつけるんだと、そうやって初めてチームのよさが生まれて来るんだと思うので、その辺が薄まらないようなシステム作りといいますか、そういうことができれば、非常に良いかなと思っています。

（榎野教育長） 上手くいけば非常に上手くいくと思いますが、怖いのは、全員が担任であるがために、責任の所在が曖昧になったりしないかなということです。要は、チームの資質だと思うんですね。チーム全体の資質が高ければ上手くいくと思います。資質

がでこぼこしたチームだったら、課題が出てくるのかなと感じます。しかし、けっして悪い発想ではなくて、いろいろ調べて、研究してみる価値のあるやりかたかなと思います。今日提案のあった2点、いずれも調べてみようという思いを持ったところです。

（松浦委員） 今、聞いていて思うのは、こういうことを見たり読んだりして、「おもしろいな」とか「すごいな」という発想を原点に持ってお仕事をしていただきたいなど、「この点がだめなのでできない」という話し合いではなくて、「こういうことが面白いな」ということをスタートとして、教育行政の皆さんには取り組んでいただければもっともっと柔軟なことができるんじゃないかなと思います。

（槇野教育長） しっかりと調査研究をしながら、可能なことから取り組んでいければよいなというふうに感じたところです。

6 その他

（槇野教育長） 次に、「その他」に入ります。教育委員会の後援・共催事業について、教育部 建部次長 に説明をお願いします。

（建部次長） 資料に基づき説明

（槇野教育長） 只今の報告について、質問等はありませんか。

（各教育委員） ありません。

（槇野教育長） その他、委員の皆さま、あるいは事務局の方で、何かございますか。

（各教育委員） ありません。

7 次期教育委員会の開催時期

（槇野教育長） 次期教育委員会の日程ですが、6月25日（火）の、午後2時から、市民応接室で開催いたします。

閉会

（槇野教育長） 以上をもちまして、令和元年5月出雲市教育委員会定例会を閉会します。

(15:25) 定例教育委員会閉会